

経営分析の手法について

広い意味では経営分析という場合は、生産管理や人事管理、および販売管理なども意味しますが、通常は経営分析＝財務諸表(貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書)、分析のことを言います。簿記記帳の結果を漫然とながめているだけでは、「経営感覚」は身につけません。経営分析の知識を少し持つだけで、自己の経営の状況が鮮やかに見えてきます。是非、経営分析に興味をもって農業経営の改善に活かしていきましょう。

1 貸借対照表(安全性分析)

貸借対照表は、資産を流動資産と固定資産、負債を流動負債と固定負債に区分して、それぞれの割合から、自己の経営が安全かどうかの安全性について分析します。

<貸借対照表>

	資産の部	負債・資本の部
流動資産	当座資産(現金・預金等)	流動負債(返済期限が1年以内)
	棚卸資産(未販売農産物等)	固定負債(返済期限が1年以上)
固定資産(農地、機械、施設等)		自己資本(元入金)

(1) 流動比率(計算式(%)) = 流動資産 ÷ 流動負債

短期的な支払い能力を表す基本的比率です。この比率は100%以上であることが必要ですが、流動資産の中には必ずしもすぐに現金化できないものがあるので当座比率とあわせて判断することが必要です。

2) 当座比率(計算式(%)) = 当座資産(流動資産 - 棚卸資産等) ÷ 流動負債

現金や預金など短期間に現金化できる資産が、短期に返済する必要がある負債の支払いにどの程度備えているかを判断する指標です。通常80%以上は必要とされています。

(3) 固定長期適合率: 計算式(%)) = (自己資本 + 固定負債) ÷ 固定資産

固定資産に対する自己資本・固定負債の割合を示すもので、固定資産の保有状況および新規設備 投資計画が適切かどうかを判断するための比率です。100%を超えていることが望ましく、それ以下だと資金繰りに苦労することになります。

(4) 自己資本比率: 計算式(%)) = 自己資本 ÷ (流動負債 + 固定負債 + 自己資本)

農業に必要な財産がどの程度自己資本で調達できているかを示し、財産の状態の健全性を示す比率です。理想的には50%を超えていることが望ましいとされています。

2 損益計算書(収益性分析)

損益計算書は、「一定期間(通常1年)」の財産の増減の原因を説明する表です。この表の売上高と費用項目の割合、各段階の利益の割合から、主に効率的な経営を行っているかどうかの情報を含んでいます。これを収益性分析といい「いかに効率よく経営を行っているか」を示す指標です。

<損益計算書>

$$\boxed{\text{売上総利益}} = \text{売上高 (収入金額)} - \text{売上原価}$$

(期首棚卸高 + 当期農産物製造費用 - 育成費振替高 - 期末棚卸高)

$$\boxed{\text{営業利益}} = \text{売上総利益} - \text{販売費及び一般管理費}$$

$$\boxed{\text{経常利益}} = \text{営業利益} + \text{営業外利益} - \text{営業外費用}$$

$$(1) \text{ 資本利益率: 計算式 (\%)} = \frac{\text{売上高}}{\text{総資本}} \times \frac{\text{利益}}{\text{売上高}}$$

(資本回転率) (売上高利益率)

特に農業経営では、資産を効率的に用いて、利益(所得)を得ようとすることを目的としていることから、「投下した資本に対していくらかの見返りがあったか」ということが重要です。

利益をあげるためには、資本回転率をあげるか売上高利益率を上げる必要があります。

資本回転率を上げる・・・技術の改良や経営規模を拡大で生産量の増大し売上高を増加する。

売上高利益率を上げる・・・コストの低減、付加価値の高い農産物を生産する。

$$(2) \text{ 売上総利益率: 計算式 (\%)} = \text{売上総利益} \div \text{売上高}$$

いわゆる「あら利益」の対売上高比率です。この比率が高いほど効率の良い生産活動をしている、あるいは付加価値の高い農産物を販売していることになります。

$$(3) \text{ 売上高営業利益率: 計算式 (\%)} = \text{営業利益} \div \text{売上高}$$

売上高に対する農業の生産活動で得た利益の割合を示し、所得率に近い概念です。この比率が高いほど健全な経営が合理的に行われています。

$$(4) \text{ 売上高経常利益率: 計算式 (\%)} = \text{経常利益} \div \text{売上高}$$

経営の成績を見る上で重要な指標です。この比率が営業利益を下回ったら過剰投資を行っていることの目安になります。

3 キャッシュフロー計算書

キャッシュフロー計算書は、利益の増減が、どの程度、実際の現金の増減に反映されているかどうかを示す計算書です。貸借対照表と損益計算書だけでは利益と実際の現金の金額が大きく乖離することが発生します。いわゆる「勘定合って銭足らず」の状態に陥るのをくい止める役割をもっています。

(1) キャッシュフローマージン

計算式(%) 農産物販売に関するキャッシュフロー÷売上高

売上高に対してどれだけの現預金を生んでいるかの指標です。売上高に比べてどれだけ自由に使用できる現預金があるかを把握でき、収益力を判断することができます。

(2) フリーキャッシュフロー

計算式(金額): 農産物販売に関するキャッシュフローー固定資産投資

自由に使える現預金を表します。生産活動で得た現預金から現状維持のために必要な設備投資分を引いて、残った現預金を意味しています。

4 経営分析指標の見方

経営の分析の結果は、何か他の数値との比較によって有効なものとして初めて機能します。一般的には経営分析の比較対象としては、同じ作物栽培する他の農家や自己経営の過去の経営成績の数値が使用されます。

(1) 貸借対照表分析および損益計算書の見方

① 百分率貸借対照表

資産および負債・資本総額に対する各構成要素の割合を比率で示します。各項目が百分率による共通の大きさを示されるので、同一経営体の期間比較だけでなく同作物を栽培する経営体の相互比較を容易に行うことができます。

② 百分率損益計算書

売上総額に対する各費用項目、利益項目の割合を比率で示します。百分率貸借対照表と同様の分析が可能となりますが、売上原価率、売上総利益率、営業利益率、経常利益率から経営成績の良否やその原因を究明するのに有効なものです。

③ 趨勢比率

ある年度の貸借対照表・損益分析書における各項目の数値を100%とし、これを各年度の数値を基準年度に対して百分率で示した指標により分析します。数期間にわたる発展傾向、経営成績の動向がわかります。

(2) 数値でみる経営診断の各分析手法の見方

① 安全性分析

経営が継続して存続できるかどうか把握するための経営分析手法で、短期的な債務の弁財能力を分析する支払い能力の分析と経営へ投下した資金の効率的な運用を分析する資金運用力の分析があります。

② 収益性分析

利益を獲得するための経営能力のレベルを意味し、経営の活動原理として「資産が利益を生み出す効率性」を表すものです。効率の視点を総資本におくと資本利益率が指標となり、売上高におくと売上高利益率が指標となります。

川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学科地域活性化編

「経営改善のための手引き」から抜粋

[\(戻る\)](#)